アカシア　NO.16

中国を見て・感じて・探る…大連事務所発のレポート

「人民網日本語版」より

ファーストフード産業が黄金時代に突入

中国のファーストフード産業は 1987 年に産声を上げた。同年 4 月にケンタッキーフライドチキンのチェーン第 1 号店が北京市場に進出したのを契機として、現代型ファーストフードの急速な発展の幕が開いた。1990 年代には国民総生産（GNP）成長率が 78%に達したことを背景に、ファストフード産業も年平均成長率が 20%に達して急成長し、利益率は 15-25%に上った。ファストフード産業は今や外食産業の持続的発展を支える重要なパワーであり、新たな経済成長点でもある。2005 年になると発展がスピードアップし、中国式ファストフードの専業化、チェーン化が始まった。

09 年も急成長が続き、通年の売上高は 1 兆 8 千億元を超えた。外食産業の急速な発展という良好な情勢の下で、ファストフード産業の発展も加速した。東部の省・直轄市では営業規模が一般のレストランを明らかに上回り、外食産業に占めるファストフードのシェアが広東省では 90%に達し、江蘇省、上海市、遼寧省、北京市、浙江省、山東省などでも 50%を超えた。

中国では一人あたり国内総生産（GDP）が 1 千ドルを突破し、経済体制と成長スタイルが改善を続け、工業化・都市化・現代化のプロセスが日に日に加速している。ファストフードの発展は今、空前絶後のチャンスを迎えている。

ある専門家の指摘によると、中国のファストフード産業はこれまで全体として順調に発展し、社会の発展からくるニーズに対応して、持続的な発展を遂げ、市場は緩やかに成長した。発展の過程で一連の挫折に見舞われたとはいえ、全体的な発展という方向性に影響するものではなかった。2010 年は中国ファストフード産業の黄金時代の始まりとみられ、北京などの大都市や経済が発達した地域を中心として、徐々に全国に波及し、成熟した発展段階に突入することが予想される。

この記事は、人民日報を日本語に翻訳したホームページのニュース。中国で人民日報といえば、中国共産党のお墨付きをもらった記事が厳選されて掲載されている。

その中で、ファーストフード産業の躍進をたたえる記事が掲載されているのは少々違和感がある。中国の経済成長とファーストフード産業の発展を並べ、経済成長を庶民に分かりやすく実感させようとしたものかもしれない。

確かに、中国の都市部で目につくのは、アメリカの象徴であるマクドナルド、ケンタッキーフライドチキンの店舗だ。大連市も同様で、市内にはマクドナルド 15 店舗、ケンタッキーが 19 店舗ある。繁華街やショッピングモールなど人が集まる場所には、必ずと言っていいほどこの2つは揃っている。

北九州市には、マクドナルドは 23 店舗、ケンタッキーは 10 店舗があり、2 つの合計で大連市が 1 店舗勝っている。しかし、中国では、この 2 つは安い食べ物の店ではない。庶民の月給が、日本円で2万円～4万円ぐらいの中国で、1食が300円～400円かかるこの店舗は、誰でも気軽に行ける店ではなく、日本とは位置付けが違う。それでも大連にはこの店舗数があり、しかも土日は席が取れないほど盛況だ。

アメリカ勢だけではなく、牛丼屋やラーメン屋、逆乗り込みの餃子屋、カレー屋など日本勢も大攻勢をかけており、中国系ファーストフードチェーンも多数ある。

この隆盛は、中国の労働者層の所得の向上を意味していると言えるかもしれない。自動車を買える人は、最近増えたとはいうものの人口全体の数%にしか過ぎない。しかし、ファーストフードで食事できる人は、その何十倍はいるだろう。

ファーストフードの展開は、今後は中規模な都市へと広がり、所得の向上と相まって、爆発的に利用客が増えていくことが予想される。ネットで遊び、ファーストフードを食べる一人っ子の「小皇帝」が、20年後には、中国社会を支配することになることは確実だ。その時に中国社会がどのように変貌するのかは、非常に楽しみな反面、少し恐ろしい気もする。